時間を表す文法と語彙の要素

鍛治広真
（明海大学外国語学部）

1.　はじめに

ヒトは事態の時間を認識し、認識された時間は言語によって表現される。言語を用いて何らかの事態を表現する場合，その事態がいつのことであるのかも言語表現によって示されるはずである。すなわち言語表現によって「過去～現在～未来」の時間の流れの中に事態が位置づけられ、位置づけの細かさは表現によって様々に異なる。本発表では、時間の位置づけに関わる言語表現の種類を確認した後、文と文の間の時間関係の理解に関わる要素について論じる。

2.　事態の時間位置の表現

金子亨（1995）は事態の時間把握について二種類あるとしている。複数の事態の生起を発話時を基準に配列する「歴史的な時間把握」と、事態内部の推移過程を認識する「過程的な時間把握」の二種類あり、言語による時間表示はそれぞれに対応して「歴史的時間の表示」と「過程的な時間の表示」があるとされる。日本語の用言では、「動い-タ」「来-ル」等の時制形式が歴史的時間の表示、テイル、ツツアルなどの複合形式と語彙アスペクトが過程的時間の表示の例としてあげられている。また、「いま、今日」などの名詞、「さっき」などの副詞も歴史的時間を表示する形式とされている。

本発表では主に歴史的時間の把握・表示について扱う。歴史的時間の表示とは事態の時間軸上における位置を表示することであり、「複数の事態の生起」とあるが、一つの事態と発話時の前後関係を表示することもこれに含まれると考えられる。

2.1.　言語表現による時間の位置づけの細かさ

事態の時間軸の位置付けを表す言語表現には「語彙的合成表現」(lexically composite expression)，「語彙項目」(lexical items)，「文法範疇」(grammatical categories）の 3 種類がある（Comrie 1985)。文法範疇による時間の区別がテンスである。時間位置の区別はあまり細かくなく、例えば(1)の sang は事態が発話時よりも過去に生起したということだけを表す。(2)(3)のように語彙項目や語彙的合成表現を用いるとより細かく時間を区別して表示することができる。

(1)　John sang.
(2)　John sang yesterday.
(3)　John sang on June 29.

語彙項目および語彙的合成表現は文全体あるいは述語を修飾する副詞（副詞句・副詞節）として用いられ，出来事の起こった多様な時間を表すことができる。(2)の yesterday は語彙項目に該当し，(3)の on June 29 は語彙的合成表現に該当する。

工藤真由美(1995)では時間の位置付けには、発話行為時を基準とする物と多の出来事時を基準にする物の 2 つがあるとしており、日本語では語彙的な時間副詞においてこの対立が分化されていると述べている。文法範疇においてはこの対立は絶対テンスと相対テンスの区別に相当する。

テンスの体系がどのようであるか、文法範疇としてテンスがあるかどうかは言語ごとに異なり、

Comrie（1985: 50-52）にはテンスを持たない言語であっても、realis/irrealis の区別を表す文法形式から派生的に発話時との前後関係の意味を表しうる言語の例も挙げられている。

2.2. 語彙項目と語彙的合成表現

語彙項目は文法範疇よりも細かく時間を区別して表現することができるが，語彙項目を組み合わせた語彙的合成表現は 3 つの中で最も数が多く、原理的には無限に時間位置を区別することが可能である。上記の(2)と(3)の時間位置の細かさは差がないが、語彙的合成表現として例えば時刻の表現などを用いることによってさらに細かく時間の位置づけを行うことができる。時間表現の中での語彙項目と語彙的合成表現の境界は言語によって異なる。日本語の「おととい」は単一の語彙項目と考えられるが，これに対応する英語の the day before yesterday は語彙的合成表現である。

また文法表示がなくとも、語彙項目（時間名詞・時間副詞）によって時点が示されていれば、出来事と発話時との前後関係を推論することはできる。(例.「明日の会議」)

2.3. 文法範疇以外の時間表現の分類

時間を表すの語彙項目と語彙的合成表現はしばしば副詞として用いられて，他の基準となる時間との関係性で時間の位置を特定するという機能を持つ（Klein 1994: 149)。この基準となる時間との関係について，Klein（1994）deictic（直示的）と anaphoric（照応的）に分類している。すなわち発話時（＝いま）との関係で時間が決まる表現と，前後の文脈によって決まる表現に分類している。そのため、時間の記述は文単体で完結せず前後の文とともに捉える必要がある(3 節参照)。鍛治・佐々木・嶋田 (2021) では文脈によって決まる表現について、基準時点との関係が意味の中に含まれるか含まれないかという点でさらに区別し、時間を表示する語彙項目・語彙的合成表現を次の 3 種類に分類した。

a：直示的時間表現：発話時との関係を表す（例．昨日，今日，明日）
b：相対的時間表現：文脈により与えられた基準時点との関係を表す （例．前日，当日，翌日）
c.：基準時点との関係が含まれない表現：文脈によって決まる（例．朝，5 月 5 日）

また時間的周期（「日」「年」など）との関係から、I：時間周期単位の一部を表す表現、II：時間周期単位「日」「年」の 1 単位全体を表す表現、III：非周期的時間を表す表現に分類することができる（鍛治ほか 2021)。「基準時を含む時間／基準時を含む周期」については、位置づけの対象となる時間が基準時点と同じ周期に含まれていればよく、必ずしも基準時と重ならない。

金子（1995）による時間指示の分類と比較すると，「基本的直示」が a-III の非周期的時間を表す直示的時間表現に、「派生的直示」が a-I と a-II の周期と関係のある直示的時間表現にそれぞれ対応し，b の相対的時間表現と c の基準時点との関係が含まれない表現は「暦法的指示」にほぼ対応する。

3. 談話に現れる事態の時間順序

金子（1995）の述べるような複数の事態の配列する時間順序を考察の対象に含めると、記述する際の単位は文単独ではなく、前後の文脈が必要になる。前後の文脈を考慮する（推論の材料にする）ことで、談話内での事態の時間関係が正しく導き出されるためである。

次の(4)と(5)において、e1 と e2 がそれぞれ発話時(S)より過去であることはタにより表示されている。それ加えて e1 と e2 の間にも e1<e2 順序関係がある。

(4) 雪童子はわらいながら、手にもっていたやどりぎの枝を、ぷいっとこどもになげつけました(e1)。枝はまるで弾丸のようにまっすぐに飛んで行って、たしかに子供の目の前に落ち

ました(e2)。(「水仙月の四日」)[1]
e1<e2<S

(5) ずうっと昔、岩手山が、何べんも噴火しました(e1)。その灰でそこらはすっかり埋まりました(e2)。(「狼森と笊森、盗森」)
e1<e2<S

(4)(5)では e1 と e2 の順序は言語表現によって明示されてはいないが、e1<e2 という解釈が最も自然である。Comrie によればこのような継起性について、会話の原則によって文脈から推論によって生じる推意である。複数の事態の生起順序が提示順序に反映されるのが最も容易でわかりやすく、そのため中立的な文脈では継起性の解釈が生まれる。しかし生起準と提示順が一致しないことが言語表現により明示されたり（3.1)、文脈により他の解釈が優先されたり（3.2）する場合もあり、それらの要素が事態の時間順の理解に関与していることに留意が必要である。

3.1. 言語形式によって明示される時間順序

2 節であげた事態の時間軸の位置付けを表す表現は、事態を時間軸に位置づけることで複数の事態間の時間順序を明示的に表す。(6)では e1 と e2 の時制の違いにより、発話時を基準とした時間順序がわかる。

(6) 夜だかが思い切って飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたように思われます(e1)。一疋の甲虫が、夜だかの咽喉にはいって、ひどくもがきました(e2)。(「よだかの星」)
e2<S⊆e1

つぎの(7)では e1 と e2 の時制は同じだが「それから」という語彙項目によっての先後関係が表示されている。(8)では「その前に」という語彙的合成表現によって e1 と e2、e2 と e3 の間の順序が表示される。

(7) よだかはその火のかすかな照りと、つめたいほしあかりの中をとびめぐりました(e1)。それからもう一ぺん飛びめぐりました(e2)。(「よだかの星」)
e1<e2<S

(8) 僕はもう虫をたべないで飢えて死のう(e1)。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう(e2)。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向うに行ってしまおう(e3)。(「よだかの星」)
S<e3<e2<e1

(7)(8)の例は事態同士の順序が「それから」「その前に」という先後関係を示す表現によって表されているが、2.2、2.3 で述べたように時点を表す副詞により表示することも可能である。(9)では「夕方」「次の日」「その昼過ぎの半日に」「晩方」という時間表現が現れている。これらはそれぞれ前文脈を基準にして時間位置を表している[2]。

---

[1] 例文中の「ながら」は事態の同時性を表す言語表現であり、この文では「わらいながら」と「なげつけました」の時間関係も表示されているが、本節では文と文の間の関係を論じるため、主節の表している事態同士の時間順序を扱う。

[2] 「夕方」「昼過ぎ」「晩方」は 2.3 の分類で見れば「c.：基準時点との関係が含まれない表現」に当たるが、談話において時間順序を理解するには「いつの日の」夕方/昼過ぎ/晩方なのかを文脈を参照して決める必要がある。

(9) 夕方象は小屋に居て、十把の藁をたべながら、西の三日の月を見て、「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さっぱりするねえ」と言っていた(e1)。「すまないが税金がまたあがる。今日は少うし森から、たきぎを運んでくれ」オッペルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしにつっ込んで、次の日象にそう言った(e2)。「ああ、ぼくたきぎを持って来よう。いい天気だねえ。ぼくはぜんたい森へ行くのは大すきなんだ」象はわらってこう言った(e3)。オツベルは少しぎょっとして、パイプを手からあぶなく落としそうにしたがもうあのときは、象がいかにも愉快なふうで、ゆっくりあるきだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さな咳を一つして、百姓どもの仕事の方を見に行った(e4)。そのひるすぎの半日に、象は九百把たきぎを運び、眼を細くしてよろこんだ(e5)。晩方象は小屋に居て、八把の藁をたべながら、西の四日の月を見て「ああ、せいせいした。サンタマリア」とこうひとりごとしたそうだ(e6)。
(「オッペルと象」)
e1<e2<e3<e4<e5 <S

上の(9)では副詞（句）を伴っている文の事態(e1, e2, e5, e6)は、副詞の表す時間によって事態間の時間順が理解される。「夕方」は当該文の前文脈で表される日の一部の時間を表わし、「次の日」は直前の「夕方」が含まれる日の次の日の時間を表す。「そのひるすぎの半日」「晩方」は「次の日」の一部の時間をそれぞれ表す。つまり「夕方<次の日」と「そのひるすぎの半日<晩方」という時間関係が成立し、e1<e2、e5<e6 という事態順序になる。e3 と e4 の文は時間を表す副詞はなく、これらの事態との時間順序は推論により継起的に理解される。

3.2. 推論によって導かれる時間順序

先の述べたように、複数の事態間の順序が言語表現によって明示されておらず、文脈が中立的であれば提示されている順と生起順が一致すると解釈するのが自然である。(10)は事態同士の順序を明示する表現を含まないが、e1 の後に e2 が生起すると解釈される例である。

(10) 馬車別当が、こんどは鈴をがらんがらんがらんがらんと振りました(e1)。音はかやの森に、がらんがらんがらんがらんとひびき、黄金のどんぐりどもは、すこししずかになりました(e2)。(「どんぐりと山猫」)
e1<e2<S

このような継起性について、Comrie は推論によって生じるとしており、必ずしも述べられた順序が事態の生起順序だという解釈が強制される訳ではない。(8)の例では「その前に」という明示的な表現で継起的な解釈が打ち消されている。

次の(11)の例は、明示的に前後関係を示す表現はないが、e3 が e1、e2 に先行する解釈が自然である。

(11) つめたいものがにわかに顔に落ちました(e1)。よだかは眼をひらきました(e2)。一本の若いすすきの葉から露がしたたったのでした(e3)。(「よだかの星」)
e3<e1<e2<S

(11)では e3 の文が e1 の文の原因を描写するものだと解釈するのが自然だと考えられる。すると原因となる事態は結果の事態に時間的に先行するという一般的な知識から、e3 と e1 の時間順序が導き出される。また談話を構成する文と文の関係は上記の継起性や因果関係に限定されるものではない。

(12) そこでみんなは、笑って粟もちをこしらえて、四つの森に持って行きました(e1)。中でもぬすと森には、いちばんたくさん持って行きました(e2)。(「狼森と笊森、盗森」)
e2⊆e1

(11)では e2 の文の事態が e1 の文の事態を精緻化する関係になっている。したがって e2 の生起時間は e1 の生起時間に含まれる関係にある。本発表では談話関係の詳細な分類の議論には立ち入らず、事態を時間に位置づけるには談話における文脈を対象に含める必要があることを指摘するにとどめる。

4. まとめと今後の課題

本発表では、事態の時間軸の位置付けを表す言語表現として文法範疇、語彙項目、語彙的合成表現の 3 種類があることを確認し、語彙項目、語彙的合成表現による位置づけと基準時間の関係について述べた。これらの要素は、当該文の事態を時間に位置づけるだけでなく、文と文の間で複数の事態間の時間順序の表示にもなっている。また複数の事態間の順序明示的に表示されていない場合には、推論により理解される例を示した。

参考文献

Comrie, Bernard (1985) *Tense*. New York: Cambridge University Press.
鍛治広真・佐々木文彦・嶋田珠巳（2021）「時間語彙の対照研究――時間語彙類型論にむけて」嶋田珠巳・鍛治広真編著. 『時間と言語』: 240-263 三省堂.
金子亨（1995）『言語の時間表現』ひつじ書房.
Klein, Wolfgang (1994) *Time in language*. London, New York: Routledge.
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間表現—』ひつじ書房.

資料

宮沢賢治「狼森と笊森、盗森」「オッペルと象」「水仙月の四日」「どんぐりと山猫」「よだかの星」(宮沢賢治（1987）『宮沢賢治童話集』中央公論社)